

母のつけさせたまふにて、
我よくしりぬ、あはれ我
二人の親の思ひ子と
うまれてなにもしらぬ間に、
父は身まかりたまひけり。
嗚呼悲しきかな、そのむかし
山路をめぐり寶劔を
さゝげかへりし僕まで
今も父をばなつかしみ、
神のためとて青淵の
底にしづみし玉なれば

をしとはいはで音になきぬ。
嗚呼悲しきかな、その後
石か、枯木か目はあれど
頭頂にとまるむら鳥を
おひもはらはす手はもてぞ
膝間に萌出る青草を
ぬきも得やらぬ偶像の
世とはふたゝびなりしとぞ。
嗚呼悲しきかな、今宵はや
明日にあけなん國の敵、
父の仇も神の爲、

刺にさゝれず、いくぞたび
形見の劔ぬきみても、
猶ぬきみまくほし月夜、
何をいのるか白露に
ぬるゝ履をばぬぎすてゝ、
神の御前にひざまづき
ひとり黙してゐたりけり。
ふもとの里の庭鳥の
八聲もはてゝ、天の戸の
いつおけにけん橄欖の
木の間にみゆるエルサレム

ふりぬる城の石垣に、
さし昇る日の影をうけて
神殿の軒端にゐる鳩の
翼かゝやくあしたかな。
門みおろせば僕らは
はや貢物荷ひいで、
大路せましと並ゐたり。
さればエホデは寶劔をば
ことさら右の腰にさし、
上衣のしたにかくしもち、
高屋をくだり今はとて

別るよとときに「やよエホデ、
腰の寶劔にこゝろせよ」と
母はいひつゝ氣高くも
おくにぞいりぬ子を思ふ
鶴の一聲武男の
こゝろもいとみだれ声の
葉がくれみれば、かなしくも
かへらぬ水の底深み、
底のおもひをいかにして
母やしりげんしかはあれど
神にまかせて貢物

荷ふ僕のさきにたち、
エホデは遠き椰子の城、
エリコさしてどいそぎゆく。
そもエリコなる古城は
ヨシユヤの時代に亡され、
野獅子、山猿住家なし、
荒鷲、梟聲たぬぬ、
椰子の林とあれにしを、
十八年のそのむかし
エグロン王は岩はしる
ヨルダン川の川原にて

数石をらみ、レバノンの
谷よりはこぶ棋柱
ふとしく立る大殿の
ひろき天井のこりなく、
エジプトの畫をきざむとて、
イスタエルの襟の珠、
指環の黄金うばひとり、
つくるもあはれ新城を
ふたゝびこゝにたてしなり。

五 都城

木の間にみゆる白壁も

まだあたらしき大城の
正門まぢかくなるからに、
貢の重荷おろさせて
塵うち拂ひ汗ぬぐひ、
暫しエホデは道のべの
葡萄の棚下に涼しくも
皆僕等をいこはせて、
やがて正門の鐵門にゆき、
案内をこひて、門守の
後よりゆけば門毎に
櫓をよこたへ、櫓をもち、

兵士あまたたちならぶ。
 いなよく軍馬の立つみれば、
 戦車を備へたる。
 廣庭過て大殿の
 御階の下にいたりしに、
 エグロン王は御座にあり、
 ちかく侍ふ勇士は
 狼のごとみかへりて、
 蚊のごとく疾視たる
 面襟こそはかそろしけれ。
 白き山羊の皮きたる

狼ならずは、くれなるの
 いばら花さくそのにすむ
 蝮とやいはむ、からにしき
 身にしまとへばなかくに
 夷の風体を見ぬまざる。
 いかにもなして御座ちかく、
 のぼらん物と捧げこし
 國の貢物の奇き玉、
 黄金ならねど千々に思ひ、
 萬にこゝろくだけども、
 せんすべもなみ、しかはあれど

エグロン王にいと厚く
款待されしを僥倖として
エリコの都いでにけり。
時にエホデのいひけらく
我猶思ふことあれば
暫時こゝにとまらん、
とくながともはかへりね」と
いとねむごろに仰せられ
なかくおもひわきがたく、
御顔の色もたゞならず
見ゆる物からどこまでも

まげて御供いたさんと
いらへ申せどとく行け」と
いきまきたまへば僕等も
皆家路にぞのぼりける。
空とぶ鳥もねぐらとる
椰子のはやしにわけ入れば、
夏野の原に咲百合の
賤が朝餉の煙とも
明日は消えなむ花ながら、
これにくらべは宮人の
袖のにしきも光なし。

しかはあれどもいまさらに
物思ふ身は花鳥の
あはれもしらず何時の間に、
人里遠くなりしにや。
近く聞ゆる溜水の
音にかどろきながれば、
はやギルガルの岡に來ぬ。
看れば十二の石の塚、
聽けばヨルダンの波の音、
いづれにしても父君の
昔をしのぶ我神の

舊恩を思ふ便りなる
椰子の葉しげる古池の
ほとりの草にうちふして、
「ア、我神よ、モアブ王、
野牛ににたるエグロンを
たゞ我父の敵とのみ
おもふことなく、國民の
かたきとばかりおもはせよ。
名利の念をうち消して、
まことの勇氣たまはれ」と
祈禱おはれば、かしくも

神の聖靈や光臨けん、
再びエリコにはせのぼり、
御階のもとにて國王に
つけ申すべき秘事あり、
人をしりぞけきよたまへ、
いと幸福あらんあはれとく
このよし聞えあげられよと
いへば侍者おくにゆき、
やゝ時過ぎていで來り、
いざこなたへといざなふて、
御階を昇り庭にいで、

ながき廊下すぎゆきて
涼殿まで案内なし、
もと來しかたへぞかへりける。
芭蕉の廣葉ひるがへし
吹入る風の涼しさに、
エグロン王は北窓の
隙戸おし開き藤牀に
猶うち臥して居ませしが、
神の御命といふ聲に
うち驚ろきて起きながら、
身をかへす間に上衣もて

おほひし、みぎの腰よりぞ、
あはや左手に寶劔をば
ぬくよとみしが、はや玉の
胸板ふかく刺通し、
鎧脊にあまりける。
菅のまくらも眞白なる
かやのむしろも、くれなるの
血しほに染て凄しく、
げに肥へふとる赤牛を
屠るが如し、思ひさや
べニヤミンなる族には

多しときけど、エホデまで
左手利捷にて我神の
奇しき器とならむとは。
エホデひそかに立いでよ、
涼殿の戸かたくとち、
廊下づたひ庭をすぎ、
御階くだれば夏の日の
午の暑熱のたへがたく
睡りやすらむ護衛兵、
楯をまくらに、槍をすて、
ところくに居たりしも、

みがめらるゝこともなく、
 城の門外までいでにけり。
 たゞちに椰子の林より
 はやしに入りて、西山の
 すそ野の原にかけゆけば、
 「何事ぞや」と羊牧者、
 顔み合せて行先に
 立ちふさがりぬ。我エホデ
 今日エグロンを刺してきぬ。
 いまよりゆきてエフライムの
 ますら武勇らかりあつめ

今宵エリコにくだるべし。
 とく汝等も野に山に
 腰の角笛ふき鳴し、
 我族より殊更に
 民兵多くよびあつめ、
 岩浜あらしヨルダニの
 津にくたり川上の
 浅瀬をえらみ石をつみ、
 砂をはこびて、行水を
 せきとめおきて、敵人の
 わたるに便利よくなさは、

なかくくしき功あらむと
 またかけ出し山路より
 山路にかゝりはせさりぬ。
 これをばきよて羊牧者
 かたみにいざといひかはし、
 分れちりしが遠近の
 峯もどよみて吹きたつる
 角笛の音に山彦も
 聲うちとへてすさまじや。

六 溪流

午眠はてけん御垣守、

三人いで来てみぎひたり
 立分れつゝ廊下の
 敷石の上を立ちあがり、
 「いま涼殿を見廻りしに
 人聲もなく戸は閉たり、
 はや青年はかへりしや」と
 問へば一人がいらへして、
 「いつかへりけんしらねども、
 王には猶も神言を
 獨りおもふて居ますらむ
 さなくば例の午睡して

國にのこし、姫君の
夢やみるらむ、やよやみよ、
西の高峯に日はいりぬ。
とにかくけふはおそからずや、
みゆるしなくも涼殿
いざ明てみんと立よりて
楯と槍とはかたはらの
一人にわたし、櫛の戸を
おしあけみれば、蟬の羽の
うすき御衣もしろかねの
おん冠も、血にそみて

軀はしたにたをれあり。
こはそもいかにとかけ上り、
殿しくならず、高樓の
鐘のひいきに「何事」ぞと
あわて噪ぎて、おく庭の
涼殿へとつとひ來ぬ。
をりから聞ゆる鯨波の
聲はまさしくイヌラエル
せめや來つらむ門守を
とくくめして問すやと
喚る聲も果てぬ間に、

夜風はげしく火はいで、
殿より殿にもえうつり、
城は煙となりけり。
煙をくさり火をふみて、
エホデはさきに進み入り、
ゑらみうちして敵びとの
にぐるを追はず戦ひぬ。
そのひいきには山もさけ、
その猛火には空もこげ、
エリコの城はうつせみの
この世ながらの地獄にて

みる間に灰とぞなりにける。
さてのがれゆく夷等の
かへり見すれば山の端に
いる弓張の月影の
こゝろぼそくもたどりゆく。
夜路おくらしやうくに
津をたづね川岸に
かりたちみれば水浅し、
今宵の僥倖はこれのみと
なかば渡りしおろしもあれ、
石のくづるゝ音高く

よせくる激浪にながされて、
 岩にくだかれ叫びあふ
 ソドムゴモラもかくありけん
 これよりさきに川邊まで、
 敵追下しひそかにも
 エボデはいそぎ水上に
 積にし石をくづさせて、
 又岩岸にのぼりたち、
 角笛たかく吹ならせば
 いくらともなくたさいだす
 蘆火の影のさらくと

波にうかびて敵人の
 行衛さやけし名にしおふ
 死海のうみに潮かせの
 からもとよめすしづむらん。
 西の岸にはイフライムの
 勇士多く椰子の葉を
 かたに荷ふて、ひんがしの
 岸にはあまたベンヤミンの
 武夫たちて、橄欖の
 枝を手にもち、年少き
 エボデをあけて國民の

士師とあふぎつゝ、
 モウセの歌を三たびまで、
 うたひあけたるよるこびの
 聲猶淵に残りけり。
 皆もろともにエホデをば
 ゲラの家まで送らむと
 山邊を遠く見渡せば、
 夜もほのくくとわけにけり。
 七 後序
 朝日影さしひかひたる
 ギルガルの紀念の石の

あたりより群たつ鳩の
 はるくと東の空に
 ゆくぞあやしき。

やよやまて翼にのせよ、
 山鳩よ猶太の國の
 いにしへの神の恩恵を
 つげんため我もかへらん
 うらやすの國に。

(明治十八年九月作)

明治三十五年八月十九日印刷
明治三十五年八月廿五日發行

不許
複製

牛
月
集
與
附

金
三
十
五
錢

著者 湯淺吉郎

大阪市東區南本町四丁目三十六番屋敷

發行者 金尾種次郎

大阪市東區鑄屋町三丁目七番屋敷

印刷者 江間傳三郎

大阪市東區本町一丁目三十番邸

印刷所 株式會社 大阪國文社

大阪市東區南本町心齋橋筋角

發兌所 金尾文淵堂書店

文藝圖書一覽

發兌元

金尾文淵堂本店

大阪市東區南本町四丁目(心齋橋筋角)

電話 東區 七五〇

新刊圖書

芝 肴
半月集

薄墨の松
蟬しぐれ

七日間下篇
蕪村(塑像)

尾崎紅葉氏作

芝肴

武内桂舟氏畫

芝肴目次

- 令夫人……………三章
- 倭字……………
- 胸算用……………
- 電話とビスケット……………
- 黒袖……………四章
- 藪なる哉……………
- 金盃……………
- 藥禮……………

寸價郵
珍金稅
頗五金
美拾四
本錢錢

文淵堂の業務要項

出版 弊堂は専ら文學宗教書類の出版に従事し、材料の精選と印刷装釘の鮮麗堅固を期す、聊か世の出版業者流と異にするを信す

原稿 歡迎 故に親疎不拘、紹介の有無に關せず、著者の原稿を以て其相談に應ずべし、希くは大方の諸賢幸に高顧を玉へ、其世に裨益ありと認るもの附せらる、場合には出版を爲すべく、尙原稿を送り原稿は必ず留郵便を以て送らるべし、定期刊行物は對するものは各其規に従ひ玉ふべし

印刷製本 弊堂は引く各種の製本印刷経験と便宜のあるを以て、今後之が製本の引受を爲し、余力の盡し得る限り、大方の便宜を計らんとす、其手數料の如きは、數るに少く、其費の廉潔を以て、應ずべきを以て、此事を與ふべき人、其要項左の如き

活版木版寫眞版コロンタイフ版石版銅版の印刷書籍雜誌其他の印刷製本 和洋各種の製本

賣買 弊堂は百餘の書籍雜誌の發賣に従事し、其新古を論せず、弘く之が需要に應ず、尙各地出版者の購精を以て之が擴張を計るべし

注文注意 弊堂に注文せらる、方は著者署名册數其他の要項を尤明瞭に前金を以て玉はんことを要し、問合は返信料の封入を要す、取調の正確に便し、百餘の書籍の調はさるなく、迅速に大方の便を計るべく、定期刊行物の發送は尤正確に迅速を期すべし、送金は銀行爲替、郵便爲替、(受取人欄内に小庄名の記入を要す) 郵券代用(二角増)各種其便宜に従ひ玉ふべし

市内注文 電話、書籍にて報せらるれば、即刻配達、大に大方の便宜を計るべく、(一)宗教書目(丙)に二、三の郵券封入者、近日發刊すべく、本堂と共は尤も懇切正確に購精すべく、爰に伏して大方諸賢高顧を希ふ

米光關月氏作

薄墨の松

大阪毎日新聞新刊集第二等當撰

先年大阪毎日新聞が賞を懸けて小説を募集するや應ずるもの數十種、選者の嚴正なる審査により當選の榮を荷ひし好小説二個、第一等は中村春雨氏の『無花果』にして曩に弊堂が美裝して刊行せしもの、幸に大方の賞揚を受けて五版を重ねるに到れり、而して第二等は實に米光關月氏の『薄墨の松』、本書乃ちこれ也、材を先人未發の境に取り、着想奇拔、筆致清婉、近來の佳作として推すを躊躇せず、刊行近きにあり、清榻の下一讀の榮を給へ、

製金郵
本參稅
頗拾金
美五四
麗錢錢

中村春雨氏作

無花果

一條成美畫
金四拾五錢 稅郵六錢

著者沈滯せるわが文壇に購か賞獻する所あらんと、多敷藤原の佳什の内撰者坪内博士、尾崎紅葉、幸田露伴、大谷友右衛門、依て第一等に當撰したるは春雨氏の無花果也、此作は在來の陳腐なる舊套を脱して、幸田露伴三、に反り、信託と人情の衝突家庭と社會の機若より生ずるあり、光明小説が好珠の如き女主人公の温厚と希望と、真心の復活とに依り遂に和氣をなす、樂天地となり、教育家も宗教家も共に熟讀を價するもの也、讀物なり子弟も讀むべく父兄も讀むべく、教育家も宗教家も共に熟讀を價するもの也、

短篇 雛

鳩

色刷挿畫九葉
金四拾五錢 稅郵六錢

春雨氏得意の短編二十有餘種を蒐めて、雛鳩と題す、昔往年苦心の作也

次目

- 子蘭茶會 (小説) (全上)
- 吾妹 (小説) (全上)
- 片羽 (小説) (全上)
- 追子 (小説) (全上)
- 白痴 (小説) (全上)
- 氣妙 (小説) (全上)
- 買帳 (小説) (全上)
- 天 (小説) (全上)
- 自然 (小説) (全上)
- 神 (小説) (全上)
- 人 (小説) (全上)
- 浮 (小説) (全上)
- 木 (小説) (全上)
- 松 (小説) (全上)
- 城 (小説) (全上)
- 病 (小説) (全上)
- 犬 (小説) (全上)

菊池幽芳氏著 坂田耕雪廣瀬勝平両氏書

再版 小説 七日間

上下全二冊 各一冊 四拾錢 郵税各四錢

こゝに最も美にして最大膽なる最も狡猾にして最も機敏なる絶世の佳人あり六尺有餘の男子一楸一餅せられつゝ相共に生死の境を彷徨す讀むもの心膽を寒ませんば止まらず讀者を激せしめその最後まで讀了せんば安んずる能はざらむるもの蓋し本編の如きは無からん

菊池幽芳氏著 下村爲山氏新意匠空前の美裝

再版 よつちやん

コロタイプ版數葉 金四拾錢 郵税四錢

よつちやんは今年五つの子の女で著者菊池幽芳君の令嬢ですが少の虚飾もなく眞率なる温かき同情の筆を以てその平生を詩的に書かれたるものでよほ趣味の深い冊子です兒童研究に志ある人には善き參考となり世の母たり妻たるものには如何ほ興味深く感せしむるでせうか恐らく一度この本を讀いたものはよつちやんの面影を長く哀れることは出来ませぬこれにこの冊子の體裁の可憐に美くしい事はたかに出版界を驚かすに足るべきものと固く信する處です

高安月郊氏著

三連劇詩 其の第一

重盛

製本高稚美麗 金參拾錢・郵税金四錢

中村不折畫 社會小説

金字塔

金四拾錢 郵税金四錢

新體詩集

夜濤集

金四拾錢 郵税金四錢

方今北歐の劇詩人イブセンを言ふもの多しイブセンを言ふ者は「イブセン社會劇」の譯者たる高安月郊氏を知らざる可からず氏平生瀕水の涯りに高風一名聞を當世に響かせんとす其會すれば乃ち筆を呵いて文を成す蓋し騒壇稀に見る高風の士なり上記の三著は氏の作劇詩、小説、新體詩集にして想は雲の如く高く兼は風の如く勁く人生に就いて疑問を有するの士は必ず一讀せざるべからざる也

薄田泣菫氏新體詩集

ゆく春

製本 頗美麗
金四拾錢 郵税四錢

これは薄田泣菫氏の長短五十篇の新體詩を集めたものに候。插畫には満谷國四郎君の彩画になる。コロタイプ版紙あり。エモの色刷輪廓は工學家松尾素澤君の新意匠に成り候へば見ても眼に美しく眺みては心に清き慰藉と理想を興ふべし。信し候詩集は斯様の書を諸君に勧むるに遠慮を要せずと存し候。

暮笛集

製本 頗美麗
金四拾錢 郵税四錢

暮笛集の三版は体裁を改め工夫を凝らしたる新意匠を以て現はれ候。巻中の詩も作者少なからず朱を加へ候ゆる自然面目を新たにしたるもの有之候はんと存し候世の事物の目を經れば陳くなり行くが中に詩歌のみは常に新らしく美しく候幸福なるは詩集を携ふる人と存し候ま、書肆は諸君に暮笛集を勧め候。

湯淺吉郎氏著 湯淺一郎氏書

新體詩集 半月集

製本 頗美麗
金參拾五錢 郵税四錢

半月集は出でたり。本書はヘブリウ學者として有名なる半月湯淺吉郎氏の新體詩集なり。氏が名の明治新體詩史に缺く可からざる位置を有するは夙く己に「早稲田文學」記者の評せし所本集に載めたる古英雄の如きは外山井上諸氏の「新體詩集」に先づ数年の創作にかへり、材を舊約の傳説に採り、英雄エホダの事蹟を改ひたる叙事詩にして無庸千行、雄健なるものには、大地初發、黃泉門、七雷、前子と號するあり、温籍なるものには、愛と許さる可き也。此他家あり滑稽なるものには、百猿舞をり、猿に寓して諸體白出、諷刺の妙を極む。民衆が信仰然、新婚旅、秋田家あり滑稽なるものには、百猿舞をり、猿に寓して諸體白出、諷刺の妙を極む。民衆が信仰のみにあらず、あらざる也。表紙紙畫は氏の令甥湯淺一郎氏の彩画に成り、詩と相俟て幽麗の妙を極む。

月刊詩集 春くさ

郵税共 金拾五錢

第一集には、柳田泉、河井醉茗の長短の新體詩十二編と水落露石の俳文とを蒐む。

與謝野晶子女史著 藤島武二氏書

詩集 みだれ髪

体裁 珍奇美本
金三十五錢 郵税四錢

構想に格調に變幻百出して、獨創の奇才優に新詩壇の一生面を開き、之に盛るに紅恨紫愁炎々懊惱の熱情を以てするものは、我が風女史の歌にあらざるや。我が藤島先生の樹又最も進歩せる獲得の筆致を以て、最も清新なる特長の趣味を發揮せらる。日本刻下の文藝界に於て、能く最新、最美、最高の思想を代表せるものは、非ち本書歟。

與謝野鐵幹氏著

紫

一冊 金三十五錢
郵税 金四錢

「太陽」記者大町桂月先生本書を評して曰く、「予輩は、在來の和歌に嫌らざるもの也。鐵幹此際に崛起して思想に格調に用語に、すべて古人の範圍を脱し、一生面を開きたるの新氣運は、後世より見るも、短歌史上の一大變遷也。鐵幹の短歌、奇才横溢、毫も舊態を帯びず、毫も古人の糟粕を嘗みず、其獨創の才、殆んど其比を見ず、鐵幹出づるに及んで、短歌の將來をば有望なるを覺ゆる也。」と今や國詩革新の潮流を急なるに當り、江湖の才人乞ふ本書に依つて更に發明せらるゝ所あらむことを。特に歐米の「珍木」を參照して、奇抜なる製本の體裁、先づ人目を一新せしむ。

浩々歌客氏著 下村爲山氏表紙畫

文學 雜著 出門一笑

金參拾錢 郵税 四錢

文學 雜著 詩國小觀

金四拾錢 郵税 四錢

新案美術繪はむぎ

七枚一組 金貳拾錢 郵税不要

芝蘭集

金貳拾錢 郵税 四錢

「老饕とわれ」野花「風頭等」花箱「小品文」數十を束め一編無類詩といふべきものなり。記行あり「讀」岐名「路」の如きは好箇詩趣に富める讀者の案内記なり。「向上」一路「詩行」勾花の如きは人生觀のある所を見るべし。著者の詩想は理趣に熟むを以て長と一仙家に過るを以て短とす。その人生と自然に涉りて一味の詩感感深きは今日の文壇に在りてまた一家獨得たるを失はずといふべし。卷末に「有爲のものなほ著者」が理を好む所を見るべし（大阪朝日新聞批評）

詩國小觀は極味津々たる散文と韻文とを蒐めたる冊子也。思想の健全なる著者の如きは當代の詩壇に見らる所。此書を讀む者は比評眼と稱ひ知るべきに。清涼流麗なる描寫に田園の詩趣を味ひて別乾坤に遊ぶの思あらん

此繪案畫は洋畫界に名高き滿合畫伯の彩筆に成り紅頭花の如き少女に相するに。春秋夏冬各季の花鳥風月を以てしたるもの考案の斬新色彩の豊麗彼の歐米繪畫の優品に比して毫も遜色を見ず。以て風流なる紳士淑女諸君が好事の用に供するを得んか

信仰、希望、長短、最幸、最非、天然、季節、人物、人品、景色、書籍、花木、動物、器具、風、銘の各欄にわかつて友の面影を一頁にのばしむる新案の金蘭集也

芭蕉蕪村子規三家眞蹟下村爲山氏繪畫色刷十葉

春くさ
第二集

蟬しぐれ

製本頗美麗
金廿錢 税郵不要

本書は天保以後廣收し盡せる俳句界を一掃して新趣味の號吹に努め明治文學に俳句あるを知らしめたる子規、鴨雪氏等日本派自家の最新夏季類題俳句集也表紙及び挿繪は下村爲山氏の彩筆に成り句と相俟つて満洒の妙を極む青山緑り滴るが如く杜鵑聲頭りに落つるの頃酒筒「蟬しぐれ」を緋いて詞人が清高の想を忍ば、一味の涼は先づ吹いて諸君が襟懐に入らむ
彫塑家山田泰雲氏作

蕪村翁塑像

高サ一尺弱
金三圓
小包(一貫匁迄)

山田泰雲氏は業を東京美術學校に受け彫塑の術に従ふこと多年頃研究修養の目的を以て俳句界の巨人與蕪村翁の半身塑像を造る村を月假其他諸家の筆に取り替ね、當今の俳人諸家の意見を斟酌し苦心經營數月にして漸く成るもの弊堂詰うて之を取次販賣に任ず平生蕪村翁の句風を慕へる俳人諸家は須らく一偈を求め机上に安置し朝夕其高風に私淑するを怠るべからざる也

俳諧叢書第一編 第二編 第三編 第十編 第二十編 第三十編

子規氏著書

俳諧叢書第一編

俳諧大要

●既刊第四版
定價貳拾錢
郵稅貳錢

俳諧叢書第二編

俳人蕪村

●既刊第三版
定價貳拾錢
郵稅貳錢

俳諧叢書第十一、二編

俳句問答

●全刊
定價各冊廿五錢
郵稅各冊四錢

俳諧叢書第十三編

俳句界四年間

●既刊
定價參拾錢
郵稅四錢

俳句を學ぶもの、爲に説く車丁等周到、子規子規の跡を叙したる者にして亦同人進歩の跡を叙したる者、即ち俳諧の大道なり。

蕪村は古今の俳傑なり。本書は著者が多年研鑽の結果を公にし、蕪村を以て九鼎大呂よりも重からしむ。
子規氏が「日本」ハト、ギン、等に掲載したる問答の俳諧を輯む。上巻には「俳句問答」試問及試問の答、下巻には「或問」問問隨答」を收む。
明治廿九年より三十二年に至る四年間は我新俳進歩の歴史を劃す。年之を指導し、進歩したる著者が批評を輯めたる者にして實に此四年間の俳句史たり。附録として著者が品評したる四章の文字を添ふ。

古人句集

はとゞさす發行所編纂

俳諧三佳書

●第三版
定價廿五錢
郵税四錢

はとゞさす發行所編纂

太祇全集

●第二版
定價二十錢
郵税二錢

はとゞさす發行所編纂

几董全集

●第二版
定價二十錢
郵税二錢

はとゞさす發行所編纂

召波楞良句集

●第二版
定價二十錢
郵税四錢

俳諧三佳書は同人が常に棄て難く運座の席にも郊外散策の時に懐にする三個の書「猿蓑」「續明鳥」「五重反古」を集めたり。以て元祿、天明二盛期を代表せしむるに足る。

太祇、几董、召波、楞良は天明の俳壇に立ちて無村如來を圍繞せる四菩薩なり。無村元帥の馬前に武者袋ひいて立ちほだかつたる四將軍なり。天明の俳句を研究せんとする者は、俳人無村、無村句集蘭語を讀め、既に俳人無村、無村句集蘭語に據つて無村如來の面目を明にす、乃ち此三書により四菩薩の句法を知らざる可けんや。

春夏秋冬

●明治新俳句の類題集

子規選

春之部

●既刊第三版

定價廿五錢
郵税二錢

碧梧桐、虚子選

夏之部

●既刊

定價廿五錢
郵税二錢

明治新俳句の類題句集として既に民友社より發行したる「新俳句」の一編あり。是れ明治二十八年頃の俳句界を代表する者にして尙來五星霜、此間幾多の變遷を経、新聞「日本」ホト、ギス等に掲載せられたる句各季幾十萬の多き上る。此間正に二三の句集無かるべからざりし其際無うして今日に至り、新俳句第二の句集として漸く愛に「春夏秋冬」あり、之を「新俳句」の例に倣すれば宜しく幾千百の大冊たるべきなれど、選者の精敏なる標準は僅に各季千三百余句を選ぶ。以て如何に其句々金玉にして如何に我が明治俳句の精華たるかを知れ。春之部は子規子の選になり、夏之部以下は其病重き爲め碧梧桐、虚子の兩人代つて之を選ぶ、春之部は第三版に達し、夏之部は殘部既に多からず、若も俳句を嗜む者、明治俳句の何たるかを知らんと欲する者は一讀せざる可からず。

28/10/36

燕村句集講義

春之部

第二版
定價三十錢
郵税四錢

夏之部

既刊
定價卅五錢
郵税六錢

冬之部

第二版
定價三十錢
郵税六錢

凡燕村句集を讀むに當り之を前後の二編に分ち小群大群二思追袖の爲とするよ一其跋に見ゆ。而して現存する處の燕村句集は即ち其前編なり。鳴雪子規二先鞭を始め同人等始めて此集を得てより日夕愛誦して今日に至る、其研鑽玩味の餘成る所のもの即ち此燕村句集講義なり。明治卅一年冬より始めて卅四年秋に終る殆ど三歳の間燕村句集の虛に會して冬之部、春之部、夏之部を輪讀し終り、其都度雜誌「ホト、ギス」に掲げたる者、各輯めて一卷となす。

寫生文

寒玉集

既刊
第一編
定價卅五錢
郵税四錢

寒玉集

既刊
第二編
定價卅五錢
郵税四錢

寸紅集

既刊
定價卅五錢
郵税四錢

新四人

既刊
定價卅五錢
郵税四錢

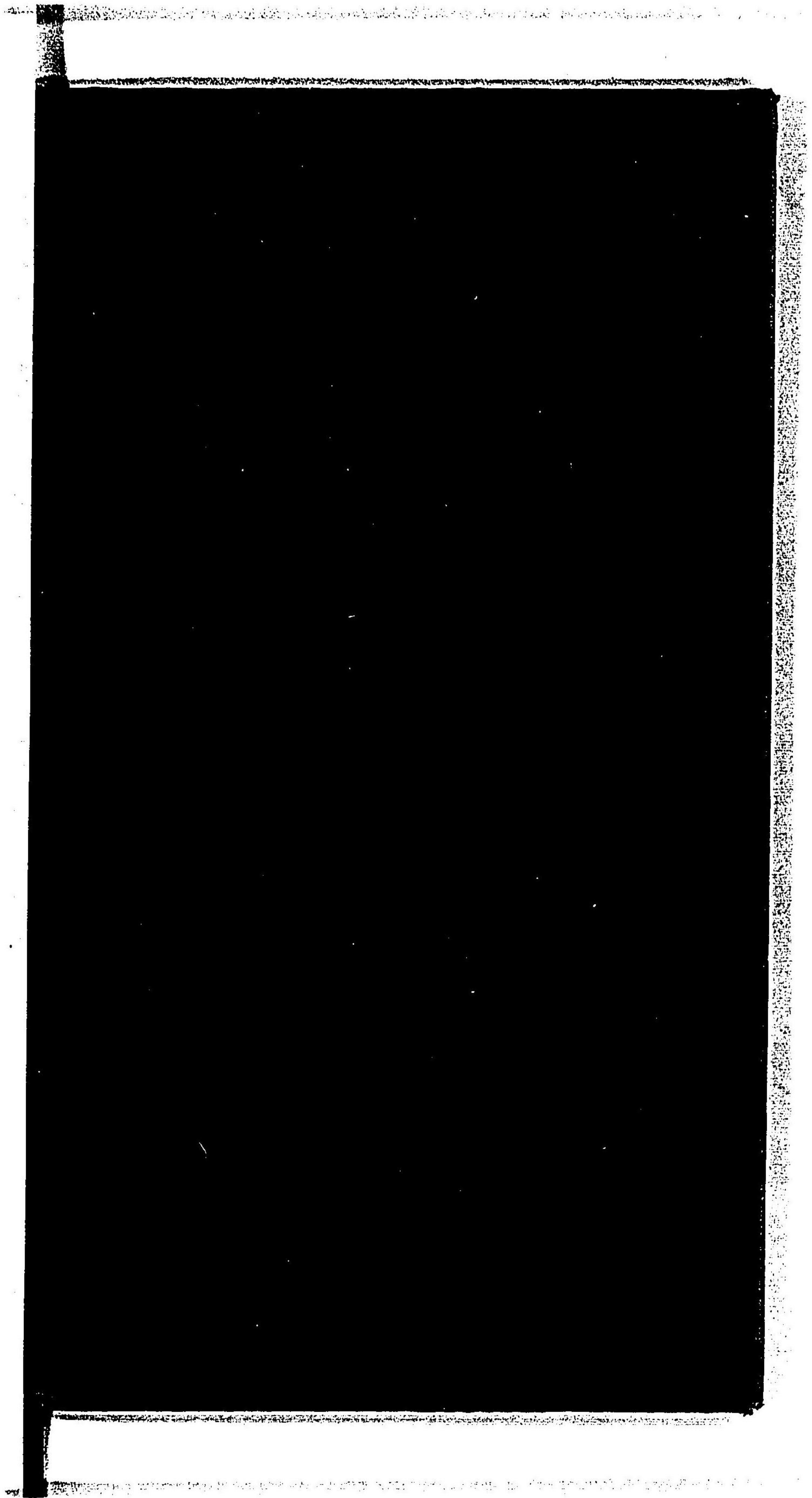
「寸紅集」は、山、と云やうな題を出して短文を「ホト、ギス」紙上で發表する等が之を選んだのである。所謂寸紅集の特色は、面白味は此集の特色である。若し俳句が詩の一體として其短文字の諸君は亦文章に寸紅集の如き短文章の面白味を解せられるであらう。

「新四人」とは、鼠骨が新聞社の代表人として、獄に入り十五日間奥の飯を食た間の観察を所謂寫生文的にさうして、言文一致で面白く書た者である。獄中の事情は此書に由て極て明白に描れてゐる。會、教育、宗教、文學の方面から此書は重きを置かれてゐる。

美文を書くには寫生といふ事が尤も大切だ併し、單に寫生といつたものでは、わがかりにくく、吾黨が喜ぶ生きた新玉の如きものであらうと試み來つた者があつた。『寒玉集』第一編及第二編を編んだのである。寫生寫生といふ問題が諸君の頭に起つた場、合には是非此書を讀んで見たい。又世間には、或は是非此書を讀んで見たい。又世間には、或は是非此書を讀んで見たい。

寒川鼠骨著







088094-000-2

96-76

半月集

湯浅 半月 (吉郎) / 著

M35

DBG-0191



